

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

Immature heart of troubled youths

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 雅宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1295

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



悩む若者たちの未熟な心

Immature heart of troubled youths

杉山 雅宏

SUGIYAMA Masahiro

I. はじめに

学校や職場、家庭内での人間関係、仕事上の不満や不安など、様々な相談を聴かせていただくなかで、20代、30代の若者たちの心性、考え方の傾向や性格の特性などを垣間見てきた。ひとことで言えば「幼い」「未熟」ということになるだろう。もちろん、すべての若者がそうだというわけではない。

人生が60年であったころの20代、30代の人たちと比べれば、人生80年、90年となった現代では、20歳はかつての15歳くらい、30歳は20歳を少し過ぎたくらいに相当するともいわれている。そう考えれば、まだ幼い面を多く残していても無理はないかもしれない。しかし、現実にはそういう人たちと職場で一緒に働かなければならないのだ。彼ら彼女たちをどのように理解していけばよいのか、どのように対応すればよいのか戸惑う人も多いのではないだろうか。

彼らも好きでそうなったわけではないだろう。社会の影響、家庭環境、育て方の問題などと、原因はいろいろ考えられる。長期間にわたり面接を続けていくと、相談者から家庭内の問題が多く語られる。彼らの持つ「幼さ」も仕方ないと思われることもたくさんある。また、そうした若者と長く接していて感じることは、彼らが幼いながらも何とかしたいと懸命に模索していることである。

人間関係もうまくいかない、仕事もうまく運ばない。親とは話がかみ合わない。そんななかで、それでもどこかに突破口はないかと、出口を模索している。暗いトンネルのなかで小さな光を、目を凝らして探しているのである。こちらがポイントをついた援助をすることで彼らは自信を回復

し、立ち直り、元の職場に戻り、あるいは新たな人間関係を作っていくことができる。そこでは、それまで彼らのなかに眠っていた能力や魅力が発揮され、力強い生活者として歩いていくことができる。

そうした若者に対する社会の理解を増すことができれば、本人たちも彼らを取り巻く人たちも、もっと生きやすくなるのではないかと思っている。

そこで本稿では、20代、30代の若者がどのような悩みを訴えているのか、その相談事例を紹介することで、まずは、若者たちにみられる傾向を浮かび上がらせてみたいと思う。

本稿で紹介する相談事例は、実際の相談内容そのままではない。複数事例を組み合わせるなどの工夫をし、本質が変わらない程度に事例を大幅に改変し、個人の特定を避けるような配慮をした仮想事例である。

II. 相談活動からみえる若者の特徴

1. 相談できない、わからないことを聞くことができない

若者たちがよく言うのは、職場でわからないことがあったり、困ったことがあったりしたときに、「相談する相手がいない」「気軽に聞くことができない」ということである。

人間関係が苦手なタイプの人が職場で孤立してしまい相談相手がみつからないという場合や、職場での人間関係はそれなりにこなすが、いざ深刻な悩みが生じたときに信頼できる相手がいない場合など、様々なレベルがあるが、共通していることは、普段からの人間関係の浅さである。

また、これまでは親に相談していたのだが、親

が亡くなった、病気になった、老いてきたので心配かけたくない、ということで相談相手がいなくなってしまったという人も少なくない。要するに、親以外の人との関係が作れていないのである。

(1) **相談事例1**：相談することが恥ずかしいという 30 歳男性会社員 A さん

大学院を修了し、企業に就職して5年。専門性を身につけた方が社会に出てから有利だろうと大学院を出て、希望企業に入社。意欲満々でのスタートだった。上司にも可愛がられ、先輩・同僚からも信頼され、仕事は楽しく充実していた。

しかし、この半年、体調がすぐれなかった。初めは依頼された仕事を難くこなしていたが、より多くの仕事を依頼されるようになると、一度聞いただけではやり方を理解できないものも増えてきた。

上司や先輩に聞けばよいとわかっていても、「こんなこと聞いたら、仕事のできない人間と思われるのでは?」「こんなこともわからないのかと思われるのでは」という思いがあり聞けない。みんな忙しそうで、いつ聞けばよいかわからないまま時間が経過してしまう。上司からは「まだできないの?」と催促され気持ちが焦ってしまう。

なんとか自分でやってみたものの、やり直しを命じられ、考え込んで時間が経過してしまったり、やり直しが増えたので残業が増えたりして、最近は帰宅が深夜に及ぶこともある。食欲不振、不眠の症状もでてきたため、心療内科を受診した。

(2) **相談事例2**：母親以外には安心して話せないという 33 歳女性会社員 B さん

結婚して10年。5歳と2歳の子どもがいる。育児休業から昨年復帰し、意欲的に仕事はしていた。60代の両親は近所に住んでいて、仕事が忙しいときは母親に手伝いに来てもらい、帰宅が遅くなりそうときは代わりに母親に保育園の迎えを依頼していた。

1年前に父が急死し、実家に兄一家が戻ってきて母親と同居することになった。母親は急な環境変化で情緒不安定になり、これまでのように手伝ってもらえなくなっただけでなく、逆に、兄嫁についての愚痴を電話で言うようになっていった。母親は仕事の愚痴を聞いてくれなくなった。

今度は自分が母親の話を聞いてあげなければならないと思いつつも、自分も仕事と子育てで精一杯。夫は多忙で帰宅が遅く、手伝ってもらうことはできない。

友人はいるが、数は少ないし、自分の悩みや家庭の事情まで話せる関係の友人はいない。誰にも話ができず、仕事と家事と子育てに追われ、気持ちのゆとりをなくし、子どもに八つ当たりして自己嫌悪に陥ることもある。仕事も家事もきちんとやりたいし、できて当然だと思う。ただ、これまで母親以外の人に相談したり何かを頼んだりということをしてこなかったのも、その母親を頼ることができなくなり、どうしたらよいかわからない。

(3) **相談事例からわかること**

どちらかというと優等生タイプの人たちが、他人に頼ることができずに自分を追い込んでしまうケースは少なくない。

若者のなかには他者に頼ることをいけないと考えている人が多い。何でも他者に頼らず、自分ひとりで解決することが大事だと考えているのだ。

また、わからないことを聞くことを恥ずかしいと感じる人も少なくない。わからないことがあるということ自体、他者には知られたくないとまでいう。

他者に相談することは弱みをみせることであり、そのようなことはできないというのである。相談することは、他者に頭を下げることで、自分を相手より一段低いところに置くように感じるのである。

そうした人たちは、困っていることがあったり、悩みがある人間は弱い人間、だめな人間と考えたりするふしがある。悩んだり、困ったりという誰にでもある自然なことが受け入れられないのである。何でもできる人にならないと他者に馬鹿にされるという思いがあるようだ。

こうした他者に頼れないという人たちは、周囲からしっかりしているとみられるため、相談を受けることが多い。ただ、自分のことについては自分の中だけで答えを出そうとする。

こういう人は、他者から信頼されるがどこか敬遠されるので、遊ぶときには誘われなかったりして、少しずつ孤立しやすいタイプといえる。

優等生タイプと表現したが、これらの人たちが

自分に自信をもっているか、自分を価値ある存在と感じているかという点、そうでないことが多い。他者からすれば、自分に自信があるだろうと思われる人が、意外に低い自己評価を下していることが多い。

これは謙虚であることとは違う。自信をもってもよいレベルであるのに、その自覚をもっていない、客観性に欠けるという点で問題になりやすい。

(4) 自己評価について

自己評価とは、文字どおり自分に対する自身の評価のことである。発達心理学的には、ごく早い時期の母子関係をはじめとした対人関係や、社会体験の影響を受けて作られるといわれている。

自己評価には、大きく分けて以下のような3つの側面がある。

1) 自尊心、誇りなど、自己評価の基底を支えている感覚や感情

幼少のころより両親や周囲の人から愛され、受け入れられたいという体験のもとに育った人は、基本的に自分に対する受容感を持ち合わせている。逆に、十分な養育環境になかった人は、こうした自己受容感を持ちにくい。自己受容感とは、ふだん意識していないレベルで自分自身を肯定的に受け入れているということである。

2) 優越感や劣等感など、周囲の人などと自分を比較して成立した自己評価感覚や意識

私たちは、他者と比較して自分が優れている面、あるいは劣っている面を確認する。これは、客観的に自分を評価するうえで必要なことであるが、このことばかりに目がいくと、常に他者との比較を意識しなければならず辛いことになる。

3) 自分に対する要求水準や理想とする自己イメージに照らし、自分の現状をみることで得られる自己評価

努力に見合った結果を得られたことで、満足を得たり、あるいは得られなかったりする。他者にはどう思われても、自分は満足、ということも大切な感覚である。

自己評価とは、高ければよい、低いのはいけない、というものではない。自己評価が高いとしても、それが他者からの評価と一致しなければ、常にそのギャップに悩むことになる。逆に、他者からどんなに高い評価をされても、自分自身がそれ

を認めることができなければ、不安な人生を送ることになる。

これに対して、たとえ他者からの評価が低くても、自分のなかに評価の基準があれば、他者からの評価はそれほど気にしなくてもよくなる。自分が努力し、それが結果を伴えば満足も得られるし、努力が足りなければ周囲の評価が高くても謙虚に受け止めることができる、という態度になれるだろう。

また、他者との比較のなかで自己評価が低くても、それが客観的な評価と一致していて、本人の努力が自他ともに認められる環境にあれば、問題にはならないだろう。

他者と比べて仕事や勉強の成果が出なくても、努力したことを自分で実感でき、それを周囲の人が認めてくれば、結果だけにこだわらず努力したことに意味はみいだせる。前述した自己評価の3つの側面のうち、2)の側面、つまり他者との比較における自己評価があまり高くなくても、1)の側面の自尊心、誇りという側面での自己評価が保たれていれば、全体としてのイメージは悪くないだろう。

若者たちのなかには、この客観的な評価よりも自己評価が低い人が多い。あるいは、前述した3つの自己評価の側面のうち2)の側面が強い人、つまり、他者に認められてこそその評価に頼る人が多い。

あるがままの自分に価値があるのではなく、勉強してよい成績をとる、責任ある仕事を任せきちんと仕上げる、それができて初めて他者に認められるようになると考えている。こうしたことはふだんから本人が自覚しているものではなく、カウンセリングの場で話しをしているうちに自覚するようになる。ふだんはそれが当たり前だと思い生活をしている。

こうした自己評価の低い人たちの人間関係は、ふだんから浅いものになりがちである。少し仲良くなっても表面的な話しかできない。本音を言えない、あるいは本音は言わず、表面的な話をする友人しか求めていない人もいる。傷つきやすいため、自分の気持ちを話すことで馬鹿にされたり、拒否されたりするのではないかと不安でたまらないのである。

こうした自己評価をする人は、上司に対して多

くを期待している側面がみられる。自己評価の基準が周囲にあるので、職場で認められたい、わかってほしいという欲求が強いのである。そして上司との関係の良し悪しが、仕事へのモチベーションを左右することが多い。

2. 自分から働きかけることができない

同じ若者からの相談でも、まだ社会に出ていない大学生の場合はさらに将来への不安が強く、自信がなく、周囲の思惑に敏感になりやすい。そのためよりいっそう受け身の姿勢をとる傾向が強くみられる。

(1) 相談事例3：他人に馬鹿にされているような気がするという大学1年生男性Cさん

2年浪人して大学に入学。希望する学部には2回落ち、希望学部を変更し、現在の大学に入学した。1年浪人している学生なら少しはいるが、2年も浪人をしている学生は見当たらない。それを馬鹿にされている気がいつもしている。

入学以来、なかなか自分から話しかけられずにいたが、いつの間にかみんなが仲良くなっていて、自分だけが取り残されている感じがする。焦って話しかけてみても話に乗ってこないし、何を話してよいのかわからないので会話も弾まない。

勉強はできるので困らないが、学校に来て話しかけられず一人であることが多く、「友だちができないやつ」と馬鹿にされているように感じてしまう。

特に語学の講義は辛い。クラス単位の講義のため、クラスに馴染めていないため教室に居づらい。二人一組になり会話することも多いが、相手を見つけないので苦労する。気軽に声をかけられないので、いつも自分が一人になってしまう。相手が嫌そうにしたらと思うと、自分から声をかけることがとても気が重く、講義を休みがちになってしまう。

(2) 相談事例4：自分から話しかけるのが怖い大学1年生男性Dさん

地方の大学から現役で都市部の大学に入り、初めての一人暮らしを始めた。中学、高校と人間関係で悩んだことはない。友人は多い方ではないが、仲の良い友だちはいて、楽しく過ごしてきた。

大学でも友だちを作り楽しい学生生活を期待

してきたが、気づくと5月の連休を過ぎたころには、クラスの仲間はそれぞれ親しくなってグループになっており、自分だけ取り残された。どうしてこうなったのかわからない。通学するのが辛くなってきた。

高校までは成績もよく自信もあった。自分から働きかけるタイプではなかったが、クラス単位で動くのでいつも誰かがそばにいて、積極的に働きかけなくてもそのうちに友だちはできた。

もともと自分から声をかけるのは苦手だった。なんて話しかければよいのかわからないし、話題もない。話しかけるのがなんとなく怖かった。向こうから話しかけてくるのを待っているうちに他の人はグループになっており、気づいたら一人取り残されていた。

(3) 相談事例5：友だちの思惑が気になる大学2年生女性Eさん

高校時代から不登校になり高校は中退。大検を受け、大学に入学した。友だちはいるが、本当に心を開いて付き合えているかといえば、できていないと思っている。いつも相手にどう思われているかを気にしながらの付き合いで、心が休まらない。

他者からの誘いを断ることができないため、行く気がなくても誘われれば遊びに行く。いつも、「こんなこと言ったら嫌われるのではないかな？」と相手の反応が気になってしまう。家に帰ってからも「あのときにあんなこと言って、相手はどう思ったのかな？ 怒ってないかな？」と考えることが多く、ぐったりしてしまう。考えすぎて眠れないこともある。

胃痛や腹痛もひどく、また、身体のだるさで1日中寝ていることも多いので、講義も休みがち。内科を受診して検査を受けたが、問題ないといわれ心療内科を紹介された。そこでうつ病と診断された。

本当に好きだと思える友人はほとんどいないが、大学内で一人であることは「友だちのいない人」と見做されるのでそれはできない。

いつも他者の思惑ばかりが気になり、自分がどんな人間関係をもちたいのかわからないし、そのようなことを考えるゆとりはない。

(4) 相談事例からわかること

彼らに共通しているのは、自分から話しかける

ことができないという点である。高校まではクラス単位の授業で、同じクラスの仲間とほとんど1日中一緒に過ごしていた。そのため、積極的に話しかけなくても近くににいる人とはなんとなく親しくなることができ、消極的なタイプの人でも友だちを作ることが難しくなかった。

ところが大学生になり授業ごとにメンバーの違う学生と席を共にする形になると、自分から声をかけたり、声をかけられたときにある程度会話のできる人でないと友だちを作ることができない。それでいつの間にか取り残される、という状態になってしまう。

また、高校での成績がトップクラスでも、大学では同レベルの人が集まっているため、当然、勉強で特に秀でることが難しい。そうすると急に自信を喪失し、自分から人に話しかけることができなくなってしまうのである。

ここで共通するのは、他人に対する姿勢が受け身であるということである。常に他者の視線が気になり、自分から主体的に関わることができない。相手から声をかけてもらえば安心して話せるが、自分からは行動できない。「自発性、主体性が確立されていない」ということが、彼らをみる際の大きなポイントになる。

3. 自己中心的発想から抜け出せない

自己中心的発想をする若者が多いことはよくいわれることである。自己中心的発想から抜け出せないのは幼児性の最たるものであるが、混み合う電車内で足を組んで座る、ヘッドホンから音が漏れているのに無頓着であるなど、再三の注意にもかかわらずこうした行為はなくなる。自分の行為が他人の迷惑になっていないか、という視点が欠けているのである。

(1) 相談事例6：自分の気持ちを何よりも優先させたいという24歳女性会社員Fさん

もともと気分の波が大きく、気持ちのコントロールができないと感じていた。最近、その傾向が強くなった。

仕事は無難にこなし、社内サークル活動にも楽しく参加し、充実した生活だった。男性社員に誘われることも多く、数ヶ月前から恋人もでき、楽しく過ごしていた。

ただ、彼が思うように行動してくれず、次第に

不安になり、一人でいることが辛くなってきた。デート帰りに送ってくれないときなど、帰宅後電話して「なぜ今日は送ってくれなかったの？」と攻撃し、納得するまで長電話してしまう。

「明日も早いから、続きは明日会って話そう」と言われても、気持ちが落ち着くまで電話を切ることができない。彼の行動が原因でこういう状態になるのだから、彼が付き合うのは当然だと思う。

恋人には遠慮なく甘えられるが、女性の友だちには気を遣い、いつも話の聞き役を買って出してしまう。

先日その友だちから、「辛いことがあって死にたくなった」と打ち明けられた。すごくショックで、落ち込んだ。相手のことも心配だが、それよりも自分を置いて死んでしまうなんて、自分が拒否された気分になり落ち込んでしまった。その友だちのことを心配するより、自分の気持ちでいっぱいになってしまう。そんな自分にも嫌気がさしてしまう。

(2) 相談事例からわかること

最近の若者に増えるタイプとして、おしゃべりはしたいが人の話は聞きたくないという人がいる。自分の興味ある話のときは自分も加わるが、興味のない話になると途端にしらけた顔をするので、友だちからも「自己中心的な人」と嫌われている。

それを指摘すると、「自分は話したいことだけ話せばいい。興味のない話にはどういう顔をしていればいいのかわからない」などと反論する。

人は誰でも、乳幼児のころは自分の好きなときに寝て、泣けば親が飛んできてくれ欲求を満たしてくれる、まさに自己中心の世界にいる。

それが成長するにつれ、いつも自分の思い通りにならないことを学び、社会化するのである。しかし、その過程をきちんとこなすことなく青年期を迎える人もいる。

エリクソンは、その発達理論のなかで、人間の発達を乳児期から老年期まで8段階に分け、その段階ごとの課題を提唱している。この考え方は、人間の発達を心理社会的側面から捉え、そのライフサイクルに伴う課題の達成を考えたものである。

エリクソンはそこで、20代から30代にかけて

の青年期の課題をアイデンティティの確立であるとしている。アイデンティティの確立とは、「自分とは何か」を明確にすることといえるだろう。

世の中が単純であれば自分の選択肢も限られているが、現代のように複雑な世の中では、何を選択するか、どう生きていくかを決定することはそう簡単にはできない。そのため課題達成のために時間がかかり、人によってはモラトリアムに陥る場合があるとエリクソンはいう。

エリクソンは発達理論のなかで、児童期（3、4歳～6歳ころ）を自発性、自主性を育て始める時期であるとしている。自分が自分の行動の中心になる時期であると言い換えることもできる。これは自分中心ということではなく、自他のバランスを取りつつ、自分の行動をコントロールできるようになるということである。これをフロイトの発達理論に照らすと、この時期はエディプス期に重なることになる。エディプス期とは、それと知らずに父親を殺して母親と結婚したエディプスが、その事実が判明し、母親が自殺した後、自らの両目をつぶして放浪の旅に出るというギリシャ悲劇から名付けられたものである。

一体化したように密着した母子関係のなかで自己中心的な生活をしてきた乳児が、幼児期になって父親の存在を意識し、母親は父親の伴侶であることを認め、母親を独り占めしたいという欲求を諦めて社会化していくことを始める時期がエディプス期であるとされている。

人はこのように、3～4歳の幼いころから少しずつ自他のバランスをとりつつ、主体的に生きること、思うようにならない社会のなかで葛藤を抱えながら生きていくことを学んでいく。

自分から働きかけられない、つまり自発性、主体性の育っていない人やあるいは自己中心の世界から抜けられない人たちは、この時期の過ごし方、家庭環境にその一因があると考えられている。

4. 言語表現を苦手とする

これは当人からの訴えではないが、相談者の特徴の1つとしてあげられるのが、彼ら彼女らは「きちんと話せない」あるいは「しゃべらない」ということである。

相談に来て、あるいは電話をしてきて話をしな

いというのはどういうことかと思われるかもしれないが、若者にはこういう傾向がみられる。

さすがに社会人になるとそういう傾向は少ないが、相談に訪れる学生のなかには、相談室に入っても自ら口を開かず相手から質問されることを待っていたり、一言二言答えただけでそれ以上自分から発信しなかったり、という人も少なくない。

嫌々来たのかなと思うこともあるが、そうではなくて自分の状況や気持ちを表現することが苦手な人が多いのである。

社会人でも電話相談の場合、何を困っているのか状況説明のできない人は少なくない。

仲間同士の会話では、特に説明を要しないので気軽に話せても、年長者や、上司、教員を前にするととたんに無口になってしまう。

自信がなくて年長者を前にすると緊張して話ができなくなるという人もいれば、初めて会う人に自分の置かれた状況を話せないという人も多い。

自分がどのような状況に置かれていて、何をどう困っているのか、そして何を相談したいのか、そういったことをきちんと話すためには、ある程度自分の中で問題をまとめておく必要がある。

しかし、そうした作業をせずに、とにかく聞いてほしいと電話してきたり、相談室にやってきたりして、なかなか説明せずに黙り込んでしまう。あるいは「相手は専門家なのだからわかってくれて当然」という勝手な思い込みから、一言二言話ただけで、相手が何か話してくれるのを待っているのである。

さらに、何を話してよいのか自分ではわからない、という人もいる。また、自分の感覚、感情を把握し、他人に説明することを苦手とする人もいる。このうち後者は、自分の感情、感覚に対する気づきやそれを言葉で表現すること、さらに内省することを苦手とするもので、心身症に特有の性格特性に近い。

感情や体感を把握することが苦手な、忙しくて疲れているのに無理をする、あるいはストレスを感じているのに気づかずにいて、よりストレスをため込む。そしてついには身体症状に現れるのが心身症である。

空腹を我慢しているといつの間にか空腹を忘れてしまう。それを続けているうちに空腹を感じな

くなくなってしまう。それと同様に自分の気持ちも、言葉にする習慣がないといつの間にかその変化に気づかなくなり、自分が何を感じているのかわからなくなってしまうのである。

Ⅲ. まとめ

若者から相談を多く受けていると、人間関係にまつわる相談が多いことに気づく。そしてそこからは相談者の未熟さが強く感じられる。

仕事や学業に対する目的を見失ったとしても、人間関係が保たれていれば、ひどく落ち込んだり出社や登校が辛くなったり、ということまでにはならない。

実際、仕事や勉強が楽しくて職場や学校に行くというよりも、友だちや同僚に会ったりすることがかなりの支えになるというのを、大方の人も感じるのではないだろうか。

目的を見失い出社、登校が辛いという人は、他者との関係を保ちえない幼さが大きく影響していると思われる。

こういう若者の未熟さの原因は何だろうか。

ひとつには、社会の複雑さが増したことで、それを消化して成熟していくことに時間がかかるようになった、という考えることができる。

たしかに、複雑化する社会を自分なりに噛み砕いて、自分の人生、生き方をみつけていくことは時間がかかる。現代の人の年齢は、実年齢に7掛けした程度のものではないだろうか。

エリクソンは20代から30代にかけての青年期の課題をアイデンティティの確立であるとしている。20代から30代は、自分とは何か、自分のよってたつところをみつけ出す時期とされている。社会は複雑になったため、その達成にも時間がかかるだろう。

筆者が言いたい若者の幼さ、未熟さはそういう

意味ではない。青年期に達成すべきことをしていない、ということではなく、20歳を超えた人間なら身につけていなければならないであろう姿勢のようなものを身につけていない、という意味である。

もっとも、その幼さのために、青年期の課題、アイデンティティの確立が阻まれる結果に陥りやすいということはできそうである。

このことについて考えるときにどうしても気になるのが、相談者の育った家庭、相談者を育てた親のことである。

20歳を超えた人のことについて、いつまでも親の責任を問うこともどうかと思う。それなりの年齢の者が、自分が学校や会社に適應できないことを親に責任転嫁することはいかなものかと思う。

すべてが親の責任とはいわない。そのくらいの年齢になれば、親から、家庭環境から得たものに自分の経験や考えを加えて自分らしさを確立していくものである。現在の自分の不都合を親や環境のせいばかりするのは、それこそ未熟さの表れそのものである。

しかし、そうした自分の経験を増やしていくこと、親以外の他者との関わりを保つこと、そのための考え方やスキルは、そのほとんどを親や家庭環境から学ぶものだろう。

相談者の話を聞くと、どうもその学ぶべきことを学んでこなかった家庭環境の問題に、そして両親の問題に目が行かざるを得ない。

<付記>

本稿は平成30年5月に東京都荒川区役所主催「コミュニティカレッジ」における講演（テーマは「異世代とのコミュニケーション」）原稿に大幅な加筆・修正を加えたものである。